

## 2019 CAMPUS Asia SPTC 活動報告書

チェビナ ソウル教育大学



### DAY\_1

空港、そしてホテルのロビーで、参加者たちと初めて会って挨拶を交わす時間を持った。

### DAY\_2

SPTCプログラムのオリエンテーションが終わったら、東京学芸大学のキャンパス・アジアラウンジにて、自分の名前をひらがなで書く書道体験をした。慣れた墨汁と紙だと思ったが、実際に使ってみたら、紙の質感と墨の滲み方が全く違って、筆の動かし方も韓国で身につけた書道と全然違っていたため、難しかったが新鮮な体験だった。

昼食後には、江戸東京たてもの園で楽しい時を過ごした。色んな所で一緒に写真を撮るうちに、参加者の皆さん、そして先生方との距離が少しずつ縮むような気がした。

その後、大学に戻り、4日目に予定されている小学校訪問交流活動に関する説明を聞く時間があつた。予め受け取った日程表には「交流活動」だけ書かれてあつたので、小学校の先生たちと話し合う時間になるだろうと思っていたが、日本の小学生たちを対象に授業をしなければならぬという話をプログラムの初日に聞いて、少なからず当惑した。しかし、幸いにも一緒にプログラムに参加している先生（大学院生）たちと相談しながら、授業の内容や方向などについて整理することができ、授業の準備を順調に進めることができた。

### DAY\_3

ホテルまで出迎えてくれた学芸大の学生たちと一緒に大学に移動して、すぐキャンパスツアーに乗り出した。朝早い時間だったので、閉まっている場所が多く、期末テストの期間中だったので、ほとんどの教室が試験会場として、或いは試験準備室として学生たちに使用されていたため、実際見学できる施設が少なかった。図書館で少しの間だったが、日本の小学校で使われる教科書を見る機会があった。もう少しゆっくり観察できればよかったが、その後は図書館の出入り時間や利用条件などの関係でなかなか許されず、残念だった。

その後、午前と午後の講義を通じて日本の授業研究と教育全般について大体的ではあるが理解する機会があった。その後、学芸の森&学童クラブを訪問して、学童の子供たちが一日の日課を終えて、掃除と「終わりの会」という印象的な場面を直接見る事ができた。

### DAY\_4

朝からかなり遠い距離を移動し、学芸大附属世田谷小学校を訪問して、学芸大の教授を兼任している校長先生と短い対話の時間を持った。その後すぐに、夏休み中なのにプログラムのためにわざわざ集まってくれた5年生の生徒たちと会い、簡単な自己紹介の後、授業を開始した。

各国の文化や生活の様子、そして言語における違いだけでなく、類似点も見つかる事が出来て、我々にとっても学生たちにとっても貴重な経験になったのではないかと思う。

午後に訪れた「桜芳庵」という茶道体験場所は、住宅街の間に隠れており、一見目立たない古くて小さな建物だった。日本の伝統文化と言えば装飾的で華やかなものがよく知られているが、このように飾らない、素朴で寂しくまで見える「侘寂」の美意識も、日本文化の重要な軸を担っていることが直接感じられた。

### DAY\_5

情報通信研究機関（NICT）に訪問して、さまざまな情報通信技術を見学した。さまざまな興味深い研究が進められているのを見て、基礎・応用科学・技術分野における国の惜しみない支援が重要な役割を果たしていることが分かった。

昼食後、学芸大のサークル「YUI」のメンバーに日本の伝統楽器「和太鼓」の演奏について教えてもらった。学内でも大人気のクラブであり、外部公演も頻繁に行うという話、そして演奏のため最善を尽くす学生たちの姿から彼らの強い自負心が感じられた。

その後、中央大学附属中・高校を訪問し、学校の施設および生徒の部活を見学、そして先生たちと話し合う時間を持った。お互いの教育文化の違いと、共有できる問題状況について短い深みのある対話を交わすことができ、すごく良かったと思った。

## DAY\_6

学生交流シンポジウムでは、各国における教育の問題状況について発表し、議論を行った。スケジュール的に決して余裕ではなかったプログラムの期間中に、合間の時間を利用して、発表の準備をすることは容易ではなかったが、チームの皆さんが各自の責任を果たし、お互いの長所がうまく調和されたからこそ、有意義な発表ができたと思われる。それ以降、グループ別議論の時間では、こういった解決策という結論には至らなかったが、お互いの問題状況を共有し、その問題を少し違う、新しい観点から見る機会が得られただけでも、十分に価値ある時間だったと思う。

午後の自主研修の時間では、これまでの日程上見られなかった立川市内のあちこちを見学し、「石田倉庫アトリエ」という芸術家の作業室を訪れたが、そこで学芸大の卒業生と偶然に会って、いろいろ案内してもらい、数人の現役芸術家と話を交わす幸運が得られた。

夕方には、また偶然ながら、町のお祭りを見学することができた。この時間を通じて、日本人の生活において、伝統というものは、特別な時間と場所にだけ存在する距離感のあるものではなく、生活の中に溶け込んで現在まで受け継がれてきた文化の一部となっていることを窺えることができた。

## DAY\_7

午前中にそれぞれの発表準備をし、お昼食事後には最終発表会を開始した。同じ時間と場所で同じ内容のプログラムに参加したが、お互いの背景と興味によって少しずつ違う観点の所感を話し合うという点が興味深かった。一週間のプログラムを通して、ようやく日本に対して、そしてお互いのことに対して少しずつ知り始めたようだが、もう最後の日程だという点がすごく残念でならなかったが、この「もっと知りたい」気持ちこそ今回のプログラムに参加して得られた最大な成果だと思う。

フェアウェルパーティーで会話を交わした学芸大の学生が、まもなく来週からソウル教育大学の交流プログラムに参加する予定だという話を聞いて、連絡先を交換してソウルで日程が空く時間に会うことを約束した。（そして、8月14日にソウルの校内で会って演劇サークル「貧焔Bindo」の公演の練習を見学するなどの交流の時間を約束した。）そして、ちょうど8月19～21日に東京で開催予定の韓・中・日の3校連合書道展示に私も作品を出すことになっていたのので、交流した学生たち、そしてこれまで多くのお世話になった学芸大の先生たちに招待の言葉をしたら、ありがたいことに快く見に来ていただくと答えてくださった。今回の短期プログラムの終了とともにお付き合いが終わるのではなく、今後もずっと交流を続けていけたらなと期待している。

## DAY\_8

ホテルのロビーで修了式を行い、短かったが濃密な時間を一緒に過ごした参加者たちと別れの時間を持った。

このプログラムに参加する前から持っていた一つの質問があった。日本という社会の視覚文化は伝統をしっかりと守り貫いていながらも、現代(コンテンポラリー)美術において世界で注目される成就を成しているが、これは日本の教育とどのような関係があるのだろうか。

残念ながら、今回のプログラム期間中では、美術教育関連の体験や美術授業担当教員との交流機会が与えられなかったため、見たいことは何とか自ら見つけて直接その疑問を解決するしかなかった。

プログラムの中で見て感じた間接的な経験と、自律研修の時間を最大限活用して、自分なりに下した結論は、日本人の生活の中に伝統は思ったよりずっと日常的に、そして深く根を下ろしているということだった。

現在の韓国の社会でも、伝統的な視覚文化はあちらこちらで簡単に見つけることができ、若い世代の間で生活韓服が流行のように広がってはいるけど、それでもなお、名節や特別な日、特別な場所と結びついているという感じが強い。

それに比べ、日本で出会える伝統文化は、住宅街の路地とその間の古い建物に、デパートの雑貨販売台に、学生の間で人気のあるサークル活動に、夏夜の町内祭りに着ていく浴衣にあり、どこでも距離感やぎこちなさが感じられず、ごく普通に見られる日常風景だった。

ある特別な教育方法が革新的に何かを変えることができるという期待は、簡単に抱く希望である。しかし、社会を構成する基盤は結局、一時的な特別教育よりも、自然で日常的な日々の生活の中にあるということ、改めて思い浮かべるきっかけになったのが、今回のプログラムだったような気がする。一気にある問題解決できる魔法のような方法を探そうとするのではなく、毎日繰り返される、時には退屈かもしれない日常の教育の中で、ほんの少しの進歩であっても、忍耐力を持って最後まで成し遂げることこそ、教育の持つ本質的な意味と言えるのではないかという考えを活動の感想としてまとめてみる。